展覧会：ものがたりをよむ

会期：2024 年 10 月 5 日(土)―2025 年 1 月 13 日(月・祝)

場所：上原美術館 近代館

古くから人々に親しまれてきた「ものがたり」は、歴史や文化を越えて自由に想像の世界を楽しむことができます。そして、そこに広がる豊かな世界に心ひかれた画家たちによって、多くの魅力的な絵画が生み出されてきました。

日本画家の小林古径(こばやしこけい)は歴史や文学への造詣が深く、物語や謡曲をはじめ、仏教などを題材とした絵画をたびたび描いています。なかでも平安時代の歌物語『伊勢物語』は全 125 段からなり、それぞれ異なる話が和歌とともにつづられています。

第 23 段「筒井筒(つついづつ)」では、幼馴染の男女のエピソードが書かれています。お互い成長し、恥ずかしさから会わずにいた二人ですが、男が、

筒井(つつい)つの　井筒にかけし　まろがたけ　過ぎにけらしな　妹(いも)見るざまに

(井戸の囲いで測り比べた私の背丈も、囲いの高さを過ぎてしまったようですね。あなたを見ないでいるうちに)

と女に歌を贈ります。女はそれに対し、

くらべこし　振分髪(ふりわけかみ)も　肩すぎぬ　君ならずして　たれかあぐべき

(比べ合ってきた私の振り分け髪も肩を越えてしまいました。あなたでなくて誰のために髪あげしましょうか)

と返し、歌をやり取りすることで、心を通わせます。この第 23 段に由来する古径の《井筒》では、幼い二人のこどもたちが井戸の周りで遊ぶ場面が描かれています。余白を十分にとった簡潔な画面からは、背丈や髪の長さを比べあったこども時代のさわやかな情景が目に浮かぶようです。

本展では、ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』に登場する女性戦士が遠い眼差しを湛えるルドン《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》、旧約聖書『創世記』より、最初の人類である男女が禁断の果実を受け取る場面を捉えたデューラー《アダムとエヴァ》、新約聖書においてベタニヤの、マルタ・マリア姉妹との出来事を描いたルオー《キリストとの親しき集い、ベタニヤ》など、さまざまな「ものがたり」を主題とした絵画を紹介します。これらの作品に寄り添って、耳をかたむけてみてください。描かれた作品があなただけにそっと語りかけてくれるはずです。画家たちが生み出した様々な「ものがたり」の世界をどうぞお楽しみください。

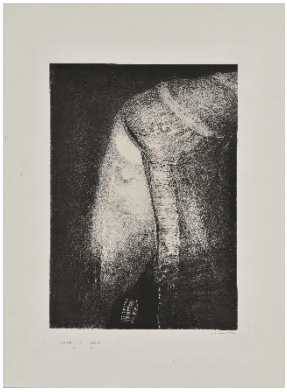
【近代館　第１展示室】企画展：ものがたりをよむ

1.　アルブレヒト･デューラー　アダムとエヴァ　1504 年
エングレーヴィング、紙　24.8×19.0cm
Albrecht Dürer　*Adam und Eva*

アダムとエヴァの物語は、旧約聖書の冒頭にある｢創世記｣に記されています。２人は蛇にそそのかされて、神に禁じられた果実に手を出します。蛇から実を受け取ろうとするエヴァの表情は明るく、うっすらと笑みさえ浮かべています。片や手を差し出しながらも、やや険しい表情でエヴァを見つめるアダムの顔には暗い影が落ちています。神に禁じられた行為をする迷いや葛藤がその表情や、強く枝を握りしめるアダムの仕草にあらわれています。

本作では、２人はまだ実を口にしておらず、原罪を犯していません。快適な楽園での生活は、彼らが実を口にした瞬間、消え去ります。それを暗示するかのように、遠くの山には｢神への不信｣の象徴である、下りられない山羊が描かれています。その他、原罪によってバランスを崩した人間の特徴をあらわすという動物たちが画面には配されています。

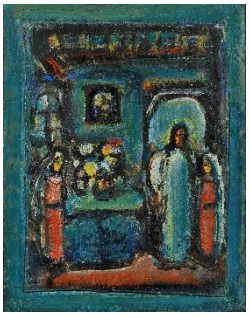
2.　オディロン･ルドン　光のプロフィール　1886 年
リトグラフ、紙　41.0×29.5cm
Odilon Redon　*Profil de lumière*



荘厳な女性の横顔が描かれています。この女性は、ルネサンス期のイタリアの画家であるピエロ･デッラ･フランチェスカがアレッツォで制作した壁画《真の十字架の発見》(1446 年)に登場するシバの女王に由来しています。シバの女王は旧約聖書に登場する人物で、聖十字架伝説にその逸話が残されています。シバの女王が、ソロモン王を訪問する際、将来キリストの磔刑(たっけい)に用いられることとなる聖十字架が、沼の橋として使われていることを心眼で見抜きます。女王は、この木を踏みつけて渡るのは恐れ多いと、その場で跪(ひざまず)き拝礼をします。女王から橋の話を聞いたソロモン王は、地中深くに木を埋めますが、月日が流れ、女王の予言通りその木は聖十字架となりました。

暗闇の中に浮かび上がる女王の哀愁を帯びた表情は、見るものの胸を打ちます。

3.　ジョルジュ･ルオー　キリストとの親しき集い、ベタニヤ　1946 年
油彩、カンヴァス(板張り)　30.7×24.0cm
Georges-Henri Rouault　*Intimité chrétienne, Béthania*



新約聖書に記された、ベタニヤでのイエス･キリストとの出来事が描かれています。花が飾られた部屋にいるのはマルタとマリアの姉妹、そして入口に立つのはイエス･キリストです。イエスがベタニヤにある姉妹の家に立ち寄った際、マルタはもてなしのためにせわしなく働き、マリアはイエスの話に聞き入りました。マリアが手伝わないことを不満に思ったマルタはイエスに「主よ、彼女に私の手伝いをするように命じてください」と訴えると、イエスは｢マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない｣と述べました。

キリストの優しい言葉のように、やわらかな輝きを放つキリストの姿は、神聖な雰囲気をまとっています。

4. ジョルジュ･ルオー　キリスト　1950 年頃

油彩、板　29.0×20.4 cm

Georges-Henri Rouault　*Jésus-Christ*

ルオーは｢ヴェロニカ伝説｣から、キリストの顔を正面から捉えた聖顔シリーズの発想を得たといいます。キリストは死に至るゴルゴタの丘に向うため、自ら十字架を背負い、役人や兵士に囲まれて町を歩いていました。それを憐れんだ女性ヴェロニカが、自身の身に着けていたヴェールを差し出し、キリストの額の汗を拭きました。その布には、キリストの面影が写されたという逸話が残されています。

画面の中央に深く瞑想するようなキリストの顔。輪郭の黒の強さが、その存在感をより際立たせています。絵具を厚く塗り固めた堅牢なマチエールと、幾層にも塗り重ねた色彩は、キリストの聖なる光をも感じさせるようです。崇高なキリストの佇まいは、敬虔なキリスト教徒であったルオーの信仰心を思わせます。

5. マルク･シャガール　シレーヌと魚　1967 年

リトグラフ、紙　66.5×49.8cm

Marc Chagall　*Sirène et poisson*

ギリシャ神話に登場するシレーヌ(セイレーン)は、美声により舟人を魅惑し舟を難破させ、死に至らしめる海の精です。ギリシャ神話に登場する姿は翼をもった姿でしたが、13 世紀頃から上半身は人間、下半身は魚の姿で語られるようになります。

夜空を泳ぐシレーヌは鱗が月光に輝き、妖しい魅力を放っています。シレーヌの右手には鮮やかな花々があり、地中海に映り込む赤い三日月とともに非現実的な世界を演出しています。眼下に広がるコート・ダジュールの海岸線は、シャガールが実際に住んでいた南仏ニースの風景です。シャガールは喜びや高揚の象徴として、空中に浮かぶ人物や生き物をしばしば描きました。豊かな彩りに包まれた幻想的なニースの夜空には、シレーヌの美声が響き渡るかのようです。

No Image

6. オディロン・ルドン　ブリュンヒルデ、神々のたそがれ　1894 年
リトグラフ、紙　38.5×30.0cm
Odilon Redon　*Brünnhilde, Crépuscule des Dieux*

本作は、作曲家リヒャルト・ワグナーに関心を寄せていたルドンが、ワグナーの楽劇『ニーベルングの指環』に登場するブリュンヒルデを描いたものです。その楽劇の最終章「神々の黄昏」は、神性を失ったブリュンヒルデが夫ジークフリートと辿る悲劇的な運命を中心に展開します。ブリュンヒルデの遠い眼差しは、旅に出た愛しき夫ジークフリートを想う姿でしょうか、かつて神々の戦乙女であった勇ましさはそこになく、ただ優美さが漂っています。

7. アンリ・マティス画／アンリ・ド・モンテルラン著　書籍『パシファエ：ミノスの歌（クレタ人）』　1944 年　リノカット、紙　33.8×26.0cm
Henri Matisse/ Henry de Montherlant Pasiphaé*: chant de Minos (Les Crétois)*

「パシファエ」は、ギリシャ神話に登場するクレタ島のミノス王の妃です。呪いをかけられた彼女は牡牛に恋をして、牛頭人身の怪物ミノタウロスを産み出します。ミノタウロスは成長するにつれ乱暴になったため、義理の父ミノス王に迷宮に幽閉されています。そして最後は、クレタ島に上陸した英雄テセウスによって命を奪われます。

No Image

右の作品は一人で佇むパシファエ、左の作品は、「誇りも後悔もなく、自分の望んだ通りに進んでいく」と語るミノタウロスが描かれています。

マティスはその独特な物語の世界をリノカット(合成樹脂に彫る版画の技法)による黒と

白の鮮烈な対比であらわしました。その洗練された線は、平面的な表現と相まって美しい曲線を奏でます。

8. 小林古径　芥川　1926 年(大正 15)年頃
絹本彩色、軸装　47.5×75.0cm
Kokei Kobayashi　*Akutagawa*

本作は平安時代の歌物語『伊勢物語』第 6 段の「芥川」に想を得た作品です。ある男が長年思いを寄せた女がいましたが、女は男より身分が高かったため結婚することが出来ませんでした。ついに男は女を連れ出し、駆け落ちを企てます。夜になり、芥川の川辺を逃げていると、夜露を初めてみた女は「あの草の上で光っているものは何ですか？」と男に聞きましたが、追手から逃げることに精一杯の男は答えませんでした。夜も更け、ひどい雷雨にみまわれたため、荒れ果てた蔵で休むことにしました。男が戸口を守り夜明けを待っている間に、女性は蔵の中に現れた鬼に、一口で食べられてしまいます。鬼に気付いた女性は悲鳴を上げましたが、雷の音にかき消されて男には届きませんでした。夜が明けて蔵を覗いた男は、女がいないことに気づいて嘆き、歌を詠みます。

白玉か なにぞと人の 問ひしとき 露と答へて 消えなましものを

（真珠ですか、何ですかとあの人が尋ねた時に、あれは露ですよと答えて、［私も露のように］消えてしまえばよかったのに）

古径は雷雨に紛れて鬼が女性の前に現れた場面を描いています。金髪を逆立てた恐ろしい形相の鬼は、上から女性を見下ろします。怪しい妖気を放つ鬼の姿は、今まさに暗闇から現れたかのような気配さえ感じさせます。薄墨で闇の中に描かれた女性と鬼、その周辺に広がる余白は、見るもののイメージを膨らませます。

9. 小林古径　井筒　1950(昭和 25)年頃　新収蔵・初公開
紙本彩色、軸装　49.3×63.5cm
Kokei Kobayashi　*Izutsu*

平安時代に作られた歌物語である『伊勢物語』第 23 段「筒井筒」は、幼馴染の男女が井戸の周りで遊ぶところから物語が始まります。ふたりは成長し、恥ずかしさから会わずにいましたが、互いに結婚を意識するようになりました。そのため、女の親が別の男との縁談を勧めても、女は聞きません。そうこうするうちに、男は女に歌を贈ります。

筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにけらしな 妹見ざるまに

（井戸の囲いで測り比べた私の背丈も、囲いの高さを過ぎてしまったようですね。あなたを見ないでいるうちに）

女はそれに対して、

くらべこし 振分髪も 肩すぎぬ
君ならずして たれかあぐべき

（比べ合ってきた私の振り分け髪も肩を越えてしまいました。あなたでなくて誰のために髪あげしましょうか）

と返します。歌をやり取りすることで、望み通りふたりは結婚しました。

歌の余韻を楽しみながら、作品に再び目を向けると、背丈や髪の長さを比べあった子ども時代のさわやかな情景が広がるようです。

10.　鏑木清方　みぞれ　1948(昭和 23)年
絹本彩色、軸装　28.7×27.4cm
Kiyokata Kaburaki　*Tsukijigawa*

No Image

本作は樋口一葉『たけくらべ』を題材に描かれています。『たけくらべ』では、吉原に住む 14 歳の勝気な少女の美登利を中心に、夏から冬にかけての季節の移り変わりの中で、吉原に住む少年・少女の日常が描かれています。美登利は吉原遊郭の遊女を姉に持ち、自身も将来遊女になる運命。美登利が淡い恋心を抱く信如は僧の道を歩みます。この『たけくらべ』の題名は、伊勢物語 第 23 段の、幼馴染みの若い男女が筒井筒で背をくらべた子供時代を懐かしむ話に因んでつけられています。

若い頃より、一葉文学を愛読していた清方は、なかでも『たけくらべ』を最も好み、よく題材にしました。ここで描かれているのは、主人公の美登利が島田髷に結い、美しく着飾って酉の市を訪れる場面です。島田髷を結うことは、美登利がもうすぐ吉原の遊女になることを意味していました。酉の市は、11 月に鷲神社で催される初冬の風物で、美登利は酉の市の縁起物である八頭を笹で刺した「頭の芋」を手にしています。

11.　小林古径　道成寺　1927(昭和 2)年
絹本彩色、双幅　31.0×68.0cm
Kokei Kobayashi　*Dojoji (Dojo-ji Temple)*

本作では、道成寺に伝わる安珍・清姫伝説をもとにした能楽作品が描かれています。双幅となっている本作の左軸には男装した白拍子(歌舞をする女性の芸能者)が舞を披露する場面、右軸には満開の桜が可憐に咲き誇ります。

ここに登場する白拍子は、裏切った男への執念に燃える娘の怨霊です。彼女のみつめる先には、もう一幅に描かれた桜の木があります。この情景は、白拍子が満開の桜の中で舞った

ことを示すとともに、道成寺の入相桜を暗示しているのでしょう。この桜は、安珍・清姫が道成寺の僧によって埋葬された場所に育ったといわれています。

古径は白拍子と満開の入相桜のみで、悲恋と情念をテーマにした世界を幽玄に物語っています。

12.　鏑木清方　築地川　1941(昭和 16)年
紙本彩色、折帖　34.0×42.5cm
Kiyokata Kaburaki　*Tsukijigawa*

No Image

蓑笠を着た船頭に化けて橋の下をくぐる獺は、雨が降るなか、恨めしそうな眼でこちらを見つめています。明治時代の築地界隈の夜は寂しく、橋に灯はありませんでした。特に幽霊橋と呼ばれていた船見橋は獺が出るといって、日が暮れてからの一人歩きは気味が悪かったと清方は語っています。

少年時代を東京下町の築地や木挽町で暮らした清方にとって、かつてそこを囲むように流れていた掘割の築地川は、いつも身近にありました。この画帖は、１０の作品とそのエピソードで綴られており、清方自身の記憶をもとに、明治半ばの築地川界隈の夏の情景を蘇らせています。ここでは、清方が祖母などから聞いたという「獺」にまつわる物語について語られています。

13.　須田国太郎　能「阿漕」
鉛筆、紙　25.4×36.8cm
Kunitaro Suda　*Noh-Akogi*

本作で描かれているのは、能「阿漕」。昔、伊勢神宮に供える魚を捕るための禁漁地で、阿漕という漁師が毎夜密漁していました。そのことが露見し、阿漕は海に沈められてしまいます。その亡霊は死後も罪業によって地獄で苦しめられつつも、密漁への執着を見せ、海に消えていきます。

本作では阿漕の亡霊の姿が描かれています。須田は素早く鉛筆を動かして、簡潔に演者の動きを捉えています。能･狂言の愛好者であった須田は、油彩画をはじめた 19 歳頃から、金剛流の謡曲修行を始め、晩年に病に臥し入院するまで稽古を欠かさなかったといいます。十

代の頃から能の舞台に足を運び、演者の姿をその場でデッサンし、その数は 6 千枚以上にのぼります。一瞬を捉えたそのデッサンは、演者がまるで動きだすかのようです。

14.　善財童子絵断簡（善知衆芸童子）鎌倉～南北朝時代（14 世紀）
紙本彩色、軸装　33.3×31.7cm
The Legend of Zenzai-doji(Sudhana), Scene of Sudhana Meeting the Sage Shilpabhijna

華厳経入法界品の善財童子の旅は、53 人の様々な指導者である「善知識」を訪ねるお話です。

本作では、愛らしい姿で描かれる二人の童子が静かに対面しています。背景には赤い花をつけた木や松が描かれ、明るい色調から穏やかな雰囲気が伝わってくるようです。

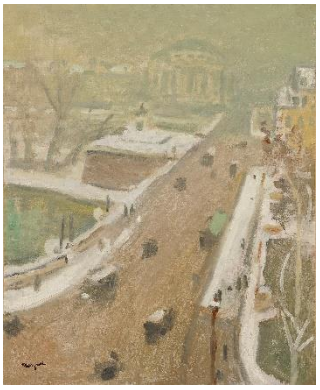
木の下に腰掛けているふっくらとした頬の童子が 53 人いる「善知識」の一人である善知衆芸童子です。彼は、合掌する善財童子に菩薩の道について教えています。

華厳経入法界品の善財童子の旅は絵巻などにあらわされ、いくつかの系統のものが作られました。本作はそのなかの一つになります。

【近代館　第 2 展示室】

一都会のざわめき

1.　アルベール・マルケ 冬のパリ(ポン･ヌフ)　1947 年頃
油彩、カンヴァス　61.5×50.0cm
Albert Marquet　*Neige et ciel vert, Paris (Le Pont Neuf)*



大雪の降った名残でしょうか。あたり一面には薄緑色の霧がけぶり、建物や歩道、車の屋根にまで雪が積もっています。この情景は 2 月のパリのようす。ベールのかかったような街のなかで白い輝きを放つ雪の表情は、それだけで冷たい冬の空気を彷彿とさせます。画面の中央にみえる石橋ポン･ヌフの上では、人々や車が絶え間なく行き交い、その部分の雪はすでに解けきっています。それらは点や線によって簡易的にあらわされてい

るものの、今にも動き出し、エンジン音や歩みの音までも聴こえてきそうです。「たとえ点でも生命のない点は描かないようにすること」、マルケの意思は画面の隅々にまで宿ります。

絶筆のひとつである本作には、マルケが最期にみた冬景色が広がります。マルケは自宅6階の窓から、移ろいゆく街のようすを飽くなき探求心で追い続けました。厳冬の冷たい情景であるはずの街は、マルケのまなざしを通してみると、不思議とそのなかに暖かささえも感じさせます。

2. 荻須高徳　ヴェニス・リアルト　1960(昭和35)年
油彩、カンヴァス　45.3×37.7cm
Takanori Oguiss　*Venice, Rialto*

No Image

昼間の穏やかな天気のなか、人々は水の流れのごとく、ゆったりと建物の前を通り過ぎてゆきます。テラコッタ色の建物はドールハウスのように整列し、前にはエメラルド色の運河が流れています。岸辺にはゴンドラ(手漕ぎ船)が停められており、街に住む人々の暮らしが垣間みえます。本作が描かれた場所はイタリアにある都市ヴェニス(ヴェネチア)のリアルト橋の近くです。水の都と呼ばれるヴェニスの街では、人々の雑踏の音と水音が絶えることはありません。荻須は絵具をたっぷりとペインティングナイフにとり、大胆かつ軽やかに街の移ろいゆくようすを描きました。

3. モーリス･ユトリロ　アトリエ劇場　1913年
油彩、カンヴァス　46.0×55.0cm
Maurice Utrillo　*Le théâtre de l'Atelier*

No Image

白を基調とした建物が立ち並ぶなかに、人々の姿がちらほらとみえます。葉をたくさん付けた街路樹が通りを彩るものの、そこには閑散とした雰囲気が漂い、人々の雑踏の音や、ささやかな会話だけが聴こえてきそうです。

三角屋根の建物の壁にはうっすらとTHEATRE(劇場)の文字がみえ、入口近くには黄色や青色で彩られたポスターのような掲示物が貼ってあることがわかります。この建物はフランスの首都パリの丘モンマルトルにある、アトリエ劇場です。ユトリロはパリで生まれ、生涯をこの街で過ごしました。本作に広がる情景はユトリロお気に入りの散歩道だったといいます。ユトリロの視点で描かれるパリの街並みには誰もが思い浮かべるような華やかなようすはなく、静謐に包まれるありふれた日常だけが粛々と紡がれています。

一幕が上がる

4.　ジョルジュ･ルオー　若い道化師　1939 年
油彩、紙（カンヴァス張り）　28.9×21.0cm
Georges-Henri Rouault　*Jeune clown*

華やかな衣装に身を包んだ道化師の女性が、目を瞑(つむ)った表情で佇んでいます。歓声で溢(あふ)れる非日常(サーカス)の空間とは裏腹に、画面のなかには静けさが漂っています。黒くて太い輪郭線は表情を優しく引き締め、幾多にも重なる絵具は女性の存在を一層輝かせます。

ルオーは幼少期にみた旅回りのサーカスの一座に心を奪われて以来、たびたび絵のなかに道化師を登場させました。敬虔(けいけん)なカトリック教徒であったルオーは、貧しい環境に身を置きながらも笑顔を振りまく道化師を通し、人間本来の姿を描きあらわそうとしたのかもしれません。画面の向こう側には、清閑(せいかん)な音の世界が広がります。

5.　マルク･シャガール　サーカス　1937 年
グワッシュ･パステル･クレヨン、紙　67.0×52.2cm
Marc Chagall　*Le Cirque*

No Image

赤や青、黄色といった色鮮やかな光が眩(まばゆ)く舞台上を照らしています。中央に立つ道化師(ピエロ)は弦楽器の衣装に身を包み、手には弓を持っています。彼が一音奏でようとすれば、会場は一瞬にして沸き立つことでしょう。観客たちは今か今かと身を乗り出し、彼の挙動に釘付けです。

会場内の賑々(にぎにぎ)しい様子はグワッシュの絶妙な混色によってあらわされています。道化師や座長、観客の姿はパステルやクレヨンのざらりとした質感によって存在感を与えられ、空間のなかで独特な気配を放ちます。よくみると左下にはロバや鶏が描かれています。これらの動物はシャガールの故郷ベラルーシでみられる動物です。彼の描く作品には故郷を象徴するモチーフがたびたび登場します。夢の中を浮遊するかのようなシャガール独自の世界観が創り出される根底には、故郷を愛する優しいまなざしがみてとれます。

6.　マリノ・マリーニ　曲芸師　1982 年

油彩、カンヴァス　50.5×37.3cm

Marino Marini　*Giocolieri*

No Image

馬と曲芸師がサーカスの舞台上で芸を披露するようすが描かれます。それらの姿は幾何学的にあらわされているものの、リズミカルに身体を動かしたときの躍動感がありありと伝わってきます。オレンジ色に包まれた背景は、観客席から飛び交う熱狂的な歓声を想起させます。

マリーニは彫刻の制作と並行し、絵画や版画の制作に取り組みました。立体と平面を行き来する中でマリーニは独自の空間感覚を身に付けます。切り絵のように平面的に描かれる動物や人体像からは、骨格を知り尽くした彫刻家の視点が垣間みえます。

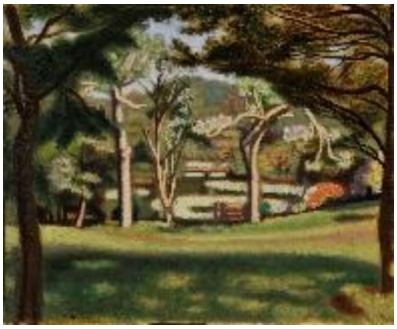
マリーニの描く画面をみつめているわたしたちはいつの間にか会場にいる観客の視点になって動物や曲芸師の動きをみつめていることに気が付くことでしょう。

―緑のささやき

7.　安井曽太郎　桐の花咲く庭　1927(昭和 2)年

油彩、カンヴァス　52.7×64.8cm

Sotaro Yasui　*Green shadow*



鮮やかな緑の情景が庭一面に広がります。手前には背の高い木々がたっぷりと日の光を浴び、濃い色の木陰を作りだしています。画面上には描かれていませんが、小鳥のさえずりや虫の羽音など、生き物たちが活発に活動を始める音までも聴こえてきそうな風景です。奥にはつつじの花の紅(あか)色や白色、桐の花の薄紫色がみえます。甘く高貴な香りが充満する初夏の季節です。

本作は、安井が日本独自の油彩表現を追求するため、日本風土に根差した主題をすすんで取り入れていた時期の作品です。丁寧に整えられた植木、池に掛かる小さな木製の橋、そして季節の花咲く庭の風景。これらには日本の美学が宿ります。若かりし安井の描く風景のなかには、穏やかでありながらも少し湿気のある風が、暖かに吹き抜けてゆきます。

8.　カミーユ・ピサロ　菜を摘む女　1890 年頃

水彩・グワッシュ・コンテ、紙　20.0×25.5cm

Camille Pissarro　*Femmes aux champs*

暖かな陽光に照らされるなか、農婦が畑仕事をしています。周りには菜が生い茂り、青々

とした爽やかな匂いがこちらまで香ってくるかのようです。そして、遠くの方からは家畜の鳴き声や農作業をする村人の声までも聴こえてきそうな、のどかな情景が広がります。

農婦たちは腰を屈め、大地を踏みしめながら仕事に励みます。2 人の菜を摘む姿からは生命力がみなぎります。ピサロによって描かれる人物や植物は、命を吹き込まれたかのように画面のなかで生き生きと動き出すかのようです。

9. 梅原龍三郎　モレー風景　1911(明治 44)年
油彩、カンヴァス　61.2×73.4cm
Ryuzaburo Umehara　*Landscape of Moret=sur=Loing*

No Image

中央にはロワン川が流れ、ほとりには赤い屋根の民家が並んでいます。川岸には 2隻(せき)の小舟がみえ、ここで暮らす人々の気配が漂います。情緒豊かな風景からは、川のせせらぎや風に吹かれた木々のざわめきの音までも聴こえてくるかのようです。

本作は梅原がフランスのモレー=シュル=ロワンを訪れた時に描いた作品です。薄塗りの油彩で描かれた画面からは、日差しが降り注ぐ夏の気候を想起させます。そして力強い筆致からは、雲の流れや草木を揺らす風の行方(ゆくえ)までもみてとれます。

梅原が画家としての駆け出しの頃にみたモレーの風景からは若さみなぎる瑞々(みずみず)しい感性が溢れます。

―静寂に耳を澄ませて

10. 岡鹿之助　林　1963(昭和 38)年
油彩、カンヴァス　80.5×65.0cm
Shikanosuke Oka　*Woods*

No Image

画面の左右から無数の枝が鋭く伸び、絶え間なく雪が降り積もってゆきます。やがてその重みに耐えかねた枝は無造作に雪を落とすでしょう。静寂の世界に、雪の落ちる音が響き渡ります。木々の交差する林の奥に目をむけると、木造の家屋が見えてきます。室内では暖炉に火を焼(く)べているのでしょうか。煙突からは黄色い煙が立ちのぼります。

はらはらと落ちる雪、降り積もる重厚な雪、岡は絵具の厚みや筆のタッチに変化をもたせることにより、それらの表情を巧みに描き分けます。本作で描かれるのは雪国の何気ない日

常の一齣(ひとこま)ですが、その風景にはどこか幻想的な雰囲気が漂います。見ているわたしたちはいつの間にか岡の創り出した銀世界へと迷い込んでしまったかのようです。

【近代館　第 3 展示室】

一親しき人へ一花とともに

1.　岸田劉生　麗子微笑像　1921(大正 10)年

水彩、紙　41.8×34.0cm

Ryusei Kishida　*Portrait of Reiko with a smile*

一輪の花を手に持つ少女が微笑みを湛えています。描かれているのは岸田劉生の愛娘、7 歳の麗子です。大正 10(1921)年 9 月 30 日の日記には、「麗子の例のメリンス(メリノウール)の赤と黄のシボリの美しいきものを着せて頭に先日の志那のかんざしをつけて、笑つてゐる半身像をはじめて、筆をおく」とあります。

劉生は生涯を通じて、麗子の像を 70 点以上描いています。劉生は麗子が生まれた日の日記に次のように記しています。「終に女児生まれる。オギヤ、といふ声をきくとゝもに、ほつとした。嬉しかつた。只嬉しかつた。その声がたまらなく可愛く、たまらなく可憐に、肉体的に本能的に自分に感じられた」。麗子の不思議な微笑みの奥には、劉生の愛娘に向けた優しいまなざしが垣間見えます。

2.　梅原龍三郎　牡丹　1925(大正 14)年

油彩、カンヴァス　37.2×39.2cm

Ryuzaburo Umehara　Peony

No Image

大ぶりの牡丹が溢れんばかりに生けられています。その艶やかな色彩は、梅原の師であるルノワールの絵を想起させます。

梅原は 20 歳のときにフランスに渡り、南仏に住む老齢のルノワールを紹介状もなしに突然、訪ねました。ルノワールは驚きながらも、若き日本人を温かく迎え入れ、その後、交流が続きます。「畫(え)を成すものは手でない眼だ、自然をよく御覧なさい」。ルノワールの言葉は、梅原の芸術を支えることとなりました。

本作が描かれたのは梅原 37 歳のとき。やわらかな牡丹の色彩には、その 4 年前に亡くなったルノワールへの敬愛があらわれているようです。

アンリ・ルソー　両親　1909 年頃

油彩、カンヴァス　17.0×20.5cm

Henri Rousseau　*Les Parents*

小さな画面に質素な服を着た夫婦が並びます。この愛らしい油彩画はアンリ・ルソー65 歳頃の作品。小さな板に両親への愛情が溢れています。

本作は画家・藤田嗣治が愛蔵したもの。藤田は 27 歳で渡仏し、ルソーとピカソの絵を見て「繪畫は實にかくまで自由でなければならないのだ」と衝撃を受け、乳白色による独自の画風を確立、エコール・ド・パリの寵児としてフランスで活躍します。しかし、第二次世界大戦の際、日本で戦争画を描くと、戦後は画壇からその責任を押し付けられ、ついには 63 歳で再び渡仏しました。

パリの藤田の自宅に飾られていたのがこの作品です。藤田はこの作品の隣に、自身の父の写真を飾りました。藤田はこの絵に亡き両親への思い出を重ねていたのかもしれません。この小さな画面には画家や所蔵者など、多くの人々の両親への愛が満ち溢れています。

3.　オディロン・ルドン　ひまわりのある花束　1910-14 年

パステル、紙　61.0×47.0cm

Odilon Redon　*Le bouquet au tournesol*

青く絵付けされた花瓶に一輪の大きなひまわりが生けられています。ピンクの花はキルタンサスでしょうか、マーガレットのような小さな花々も飾られています。ひまわりをはじめ夏の花々は、どこか季節を超越した凛とした存在感を漂わせています。

ルドンは 69 歳のときに妻カミーユの姉から引き継いだヴェルサイユ近郊の田舎町ビエーヴルの家に移り住み、静かな時を過ごします。そこでは庭に咲いた花々や、カミーユが摘んだ花を花瓶に生けて絵を描きました。色とりどりの花々は、ルドン晩年の愛情あふれる穏やかな暮らしそのもののように、美しく咲き誇っています。

一色彩のむこうへ

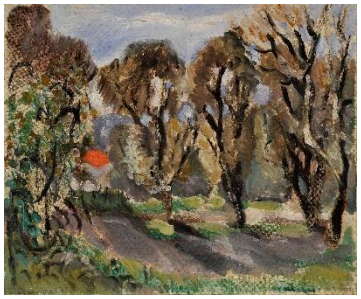
4.　アンリ・マティス　赤い屋根のある風景　1920 年頃

油彩、カンヴァス　38.0×45.6cm

Henri Matisse　*Paysage au toit rouge*

木々が立つ茂みの奥に赤い屋根が見えています。屋根の赤と近景の緑は、「補色」(お互いを強め合う反対色の効果)の対比によって、穏やかな画面にリズムをもたらしています。木立は一見、粗雑に描かれているようですが、地面の灰色を見つめていると、木々の向こうか

ら差す光が浮かび上がります。すると補色の対比がより息づいて、画面に風が吹き抜けるような空間があらわれます。



マティスは若い頃、伝統的な明暗表現を、大胆な色彩に置き換える「フォーヴ」の絵画を生み出しました。しかし、50 代には再び色彩の中に光と影を呼び戻します。本作の鮮やかな色彩の向こうには、マティスの繊細な光の感覚が息づいています。

5. カミーユ・ピサロ　エラニーの牧場　1885 年
油彩、カンヴァス　54.5×65.5cm
Camille Pissarro　*Prairie d'Eragny*

鮮やかな新緑が広がる牧草風景の中で、リンゴの木が白い花を咲かせています。草原では牛が草をはみ、ゆったりとした時間が流れています。ここはパリから 100km ほど北西へ離れたエラニー=シュル=エプト。ピサロはリンゴの名産地として知られるこの地で多くの絵を描きました。

画面全体を見ると、点のように絵具を並べた筆跡が広がっています。特に牧草の鮮やかな緑は、ピンクがかったリンゴの花などの赤系の色彩と呼応し、「補色」(反対色)の関係で互いを強め合います。

ピサロなど印象派の画家たちは、影に黒や灰色を用いることなく、影そのものを鮮やかな色彩であらわすことで、絵画に革命を起こしました。しかし、その色彩の奥には繊細な光の感覚が宿ります。この風景画もノルマンディー地方の湿潤な空の光を感じてみると、鮮やかな緑が瑞々しい生命力をいっそう輝かせ始めます。

一時を越えて

6. クロード･モネ　雪中の家とコルサース山　1895 年
油彩、カンヴァス　64.2×91.2cm
Claude Monet　*Maisons dans la neige et mont Kolsaas*

北欧の空の下、深い雪に囲まれた家々が並び、その向こうに鈍い輝きを放つ雪山が見えます。モネは 1895 年 2 月、義理の息子が住むノルウェーを訪ねました。首都クリスチャニア(現･オスロ)ではなかなか絵が描けませんでしたが、西へ約 10km 離れたところにある村ビョルネゴールで美しいモティーフを見つけます。一面に広が

る雪景色の奥に輝く 380m ほどの雪山は、モネに浮世絵で見た日本を連想させました。「この国にいるとよく思いますが、まるで日本のようです。(中略)この辺りのどこからでも見える山も描いていて、それは富士山を思わせます」。モネは家族への手紙にそう記しています。

日本の浮世絵は海を越えて印象派の誕生に大きな影響を与えました。そして、モネは心の中に浮かぶ富士山をノルウェーで描きました。その絵は時を越えて、富士山のある静岡にやってきて、今では上原美術館に収蔵されています。

7. 十一面観音菩薩像　平安時代（10 世紀）重要美術品

木造　彫眼　漆箔　座高 52.2

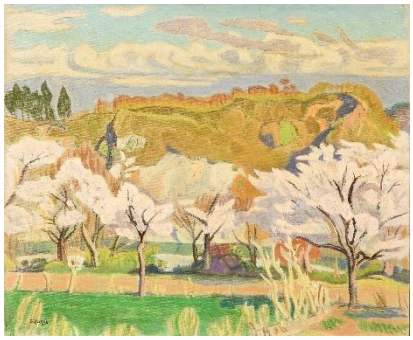
Juichimenkannon(Ekadasamukha)

頭上のお顔を含めて、あらゆる方向に目を向けて衆生を救うという十一面観音菩薩。柔らかな衣文に包まれ、腰をひねった優美な立ち姿は、およそ千年以上前に造られたとは思えないほど、モダンな感覚を呼び覚まします。木彫のお像ですが、塑像のようなふくよかな表現は、奈良時代など古いお像の影響といわれています。その穏やかなまなざしは時を越えて、現代に生きる私たち、そして未来の人々をも見つめるかのようです。

8. 安井曽太郎　桜と鉢形城址　1945(昭和 20)年

油彩、カンヴァス　60.2×72.7cm

Sotaro Yasui　*Cherry blossoms and Hachigata castle ruin*



安井曽太郎は戦争真っ只中の 1944(昭和 19)年に北京へ渡り、翌年 3 月に帰国します。間もなく安井は家族とともに埼玉県寄居町に疎開、東京目白の自宅は 5 月に空襲で焼けてしまいました。その疎開先で描かれたのが本作です。

桜並木が見えるのは寄居町を流れる荒川の土手、玉淀河原と呼ばれる桜の名所です。満開の花の向こうには荒川を挟んで中世の城跡である鉢形城址が見えます。終戦近くに安井が描いた玉淀河原の桜は、戦争などの困難な時を越えて、今なお春の訪れを知らせています。

―絵画は語る

9.　アンドレ･ドラン　裸婦　1929 年

油彩、カンヴァス　34.0×21.0cm

André Derain　*Nu assis*

腰かけた裸婦が虚空を見つめています。古典的な深い明暗に包まれたその姿は、どこか時代を超越した永遠性さえ感じられます。

この作品はコレクター上原昭二(1927 年一、大正製薬株式会社名誉会長・上原美術館設立者)が 39 歳のときに初めて手に入れた油彩画です。上原は最初この絵を見たときに、すぐにその良さは分かりませんでした。しかし、家に帰っても何かが心に残ります。そして、自らの感性を信じて初めて油彩画を購入しました。

上原はその頃、両親と一緒に暮らしていました。厳しい両親に分不相応と怒られることを恐れて、この絵をずっと押し入れに隠しては、たまに取り出して眺め、「足長お嬢さん」と呼んで大切にしました。上原がこの絵を壁に飾るようになったのは、間もなく自邸を建てたときのことです。そして、この小さな油彩画が上原コレクションのはじまりとなりました。

10.　パブロ・ピカソ　科学と慈愛　1897 年

油彩、カンヴァス　39.0×50.5cm

Pablo Ruiz Picasso　*Science et charité*

No Image

薄暗い部屋に一人の病人が横たわります。その傍らの医師は脈を取るだけですが、幼児を抱く修道女は一杯の水を差し出し、その心を癒します。この油彩画はピカソわずか 15 歳の作品。スペインのマラガに生まれたピカソは幼少より美術教師の父に絵の手ほどきを受けます。そして官展のために取り組んだのが≪科学と慈愛≫です。父の助言のもとスケッチや油彩習作を重ね、縦 2 メートルの大作に仕上げ、マラガの展覧会で金賞を受賞します。本作はその最終習作です。

ピカソは思い出深いこの油彩画を生涯手元に置きました。没後、ピカソの娘マヤ・ピカソに引き継がれます。マヤはある日本人画商と親しく、信頼できるコレクターであればと、この作品を上原昭二に譲りました。≪科学と慈愛≫の完成作や他の習作は、ピカソ美術館に収められ、スペイン国外に移動することは殆どありません。しかし、画家が愛蔵した最終習作は、不思議な縁が繋がり、いま伊豆・下田の山あいに佇んでいます。